

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 鈴木 直子

本論文は島尾敏雄の初期作品を取り上げた第一部と、代表作「死の棘」および「南島エッセイ」と呼ばれる一連の作品群を取り上げた第二部からなる。第一部では、島尾敏雄の文学的形成期に影響を与えた要因として、映画、太宰治、探偵小説の三点が挙げられている。すなわち、虚構への憧憬と写実性への関心に引き裂かれた島尾は、その一致への夢を映画的手法に託すと共に、言語化に当たって太宰治の文体が大きな影響を与えたのであるという。従来注目されることのなかった映画との関係に着目し、映像と言語との二律背反、「書くこと」の自己統御への懐疑に苦しむ島尾の様態を、「夢もの」と言われる一連の作品の分析を通して明らかにし得た点に高い独創性が認められる。

第二部はこうした島尾の課題が代表的長編「死の棘」に結実する過程が分析されている。「死の棘」を実生活の事実にも固着させる従来の読みを注意深く退けた上で、対象を記述することの絶対性が語り手＝小説家の中で崩壊していく様相と、主人公の言語観が作中の妻ミホによって変革され、あらたな関係性へ開かれていく過程が具体的に明らかにされている。次に「マレビト — 巫女」の物語としてこの小説を解釈する従来の論点が、ミホの古代性、辺境性を過大評価することによって逆に美的ロマンスに回収されてきた陥穽が指摘されている。ミホ自身が近代国家の論理に自らを同調させていこうとする主体性を持ち、その主体性が挫折していく物語として読みかえるべきであるという主張は、本土と奄美との権力関係を「対幻想」によって美化してきた従来の研究に修正をせまる提言として傾聴に値しよう。さらに沖縄の本土復帰が政治的な日程に上る1960年代に島尾がヤポネシア構想を展開していく事実に着目し、ゆたかな「原日本」として本土の側から沖縄を語ることへの躊躇が、初期の「孤島夢」から「島へ」に至る過程で次第に強まっていく過程があらたに導き出されている。

総じて特攻隊体験を扱った一連の作品との関係の分析が手薄になっている傾向も認められるが、マイノリティや女性が「被害者」として美化されてしまう陥穽をよく見すえつつ、島尾のヤポネシア構想を的確に評価していくその論旨は、単に島尾敏雄の文学を再評価するにとどまらず、文学における国家論的な枠組みに再検討をせまるものとして高く評価される。以上の点から、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。